

発表題目：「診断・管理される身体」と「私（たち）の身体」

所属：立命館大学先端総合学術研究科一貫制博士課程

氏名：中井 良平

1200字程度で発表内容を記載してください。

本研究では、病むことと身体をめぐる複数の研究領域における議論を架橋し、病者及びそのケアに関わる人の語りを見ることで、現在の医学・医療においては生物医学的診断を得ることが困難な人々にとっての「私の身体」と「診断・管理される身体」の乖離と、その乖離をめぐって立ち現れる「私たちの身体」について考察を行う。それら作業から、「病む身体」がこの社会でどのような位置を与えられている／与えられてきたのかを論じる。

医療人類学者のクライマン（1988）は、医学的な視点による「疾患」と個人が経験する苦痛やその意味を指す「病い」を区別し、当事者が感じる身体を軸とした医療の重要性を提起した。近年の人類学では、疾患と病の二分法を乗り越え、動脈硬化といった「一つの病」が病院内外の様々な場でいかに複数性を帯びて存在し、診断や治療の中で相互作用するかを論じたモルの議論（2002）が注目されるようになった。だが社会学者の野島（2021）が「論争中の病（=contested illness）」をめぐって論じた通り、現時点では生物医学的に疾患や因果が明らかにできず、病の存在が疑われる場合、当事者の声は「非正統的」「不合理」「詐欺的」なものとみなされ、病をめぐる公正・分配・包含といった診断・治療の相互作用のプロセスの実行自体が難航する。

発表者は、これまで「詐病」言説の歴史的変遷をフーコーの生権力論や近代の国家による国民管理の暴力性に注目して紐解き、「詐病」が科学・医学的根拠に先立ち、政治的・社会的に形作られたものであることを明らかにしてきた。実際、「論争中の病」を有する人々は医学・科学的根拠、知覚する不調など「一つの病」をめぐり相互作用するだけでなく、「診断・管理される身体」を根拠に、「私の身体」に対する社会的眼差しや、「私の身体」を制度のはざまに留め置く国家・製薬会社など様々な権力との交渉も迫られる。

近年では、ICTの発展に伴い、当事者たちは身体に起こった不調や同様の不調を有している（かもしれない）人々とオンラインで繋がるようになった。そこでは「診断・管理される身体」と異なる「私の身体」は、複数的な「私たちの身体」として立ち現れる。そして社会から正統性や合理性を認められない「私の身体」に関する感覚や対処が共有され、「私たちの身体」を「偽」とみなす社会への抵抗が展開することもある。だが、こうした「私たちの身体」をめぐる繋がりや運動を形成する人びとの間には、参与する目的や動機、身体的不調の軽重や有無、病そのものの意味づけが異なり、モルが提唱したような二分法を乗り越える場所までは行きつかない。

本発表では、医療人類学・医療社会学・歴史社会学における議論を架橋し、「contested illness」とみなされてしまう人たちに関わる語りを見ていくことで、この社会の病者障害者観や諸制度が「どのように」形作られ、ケアをめぐる実践が「どのように」ひとつにまとめ上げられてしまい、病者障害者の現実が「どのような」ものなのかが議論可能となることを示す。

<参考文献一覧> ●Kleinman, Arthur 1988 *The Illness Narratives : Suffering, Healing, and the Human Condition*, Basic Books. = 1996 江口重幸 他訳『病いの語り——慢性の病いをめぐる臨床人類学』, 誠信書房. ●Mol, Annemarie 2002 *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*, Duke University Press. = 2016 浜田明範・田口陽子 訳『多としての身体——医療実践における存在論』, 水声社. ●野島那津子 2021 『診断の社会学——「論争中の病」を思うということ』, 慶應義塾大学出版会.